

Different Physiological and Subjective Responses to the Hyperthermia Between Young and Older Adults : Basic Study for Thermal Therapy in Cardiovascular Diseases

澤渡, 浩之

<https://hdl.handle.net/2324/1500543>

出版情報 : 九州大学, 2014, 博士 (保健学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (3)

氏名	澤渡 浩之
論文名	Different Physiological and Subjective Responses to the Hyperthermia Between Young and Older Adults : Basic Study for Thermal Therapy in Cardiovascular Diseases (温熱環境下における若年者と高齢者の生理的・主観的反応の違い : 心血管病患者に対する温熱療法の基礎的検討)
論文調査委員	主査 九州大学 教授 藤田 君支 副査 九州大学 教授 加来 恒壽 副査 九州大学 教授 栢森 裕三

論文審査の結果の要旨

温熱療法を利用した在宅療養中の慢性心不全(CHF)患者に対する補助療法の確立を目指し、本論文では二段階の研究を行った。第一段階では、健常な高齢者と若年者を対象に頸部下サウナによる温熱療法に対する生理的・主観的反応の差異を検討した。高齢者は、若年者と比べて頸部下サウナによる加温によって、皮膚温が上昇し、血圧が大幅に低下していたにもかかわらず、主観的には若年者と差異が無かった。高齢者では温熱負荷による深部体温上昇に伴う血管拡張に対して心機能が代償できず収縮期・拡張期血圧共に低下したことが考えられる。第二段階では、CHF患者でも循環動態に危険な変動をきたさずに深部体温を上げることができる下肢加温法を考案し、入院中のCHF患者に対して下肢加温による温熱補助療法の睡眠と心血管系への効果を検討した。介入の結果、3晩連続の下肢加温によって最も浅い睡眠期Stage N1を減少させた。また、CHF患者の予後など関連する血流依存性血管拡張反応と血漿BNP値も改善させた。下肢加温法は安全に在宅でも施行可能なCHF患者への補助療法となり得ることが示唆された。本研究は温熱療法に対する循環動態変化の加齢の影響を明らかにし、高齢のCHF患者への補助療法としての有用性を示唆したもので、意義ある結果と考えられる。

予備調査において、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。

よって本論文は予備調査委員合議の上、博士(保健学)の学位に値する論文として価値あるものと認める。